

男声合唱

【子どもたちと同じ目標を持つことができるのは、教師冥利に尽きる】

何のテレビ番組かは覚えていないが、高校生の男子のみの合唱を見たことが発端である。ひげの生えたごつい感じの高校生の男子生徒たちが、顔よりも大きい口を開け歌う姿が、すごくかっこよく見えた。その時私は、中学校で担任をしていたが、担当していた学年は男子、女子共にちょうど100人、合計200人の生徒で構成されていた。

「男子100人の合唱団を作りたい」

私は、学年会で提案をしたが、その時生徒たちは2年生。部活動、生徒会その他忙しい。実現には1年待つこととなる。準備を進め、3年生になると同時に、男子のみの合唱団を発足させた。まず、100名の男子を集め、趣旨を説明。目標に掲げたのは「本当のかっこよさの追究」。全く教師主導のスタートであった。

学年の職員で激論の末選んだ曲は「斎太郎節」。“エンヤトット エンヤトット 松島の サーヨー ……”という宮城県の民謡を合唱曲にしたものだ。練習は昼休みに行い、集まれる者のみが集まる。中学3年生は忙しい。なかなか人が集まらない日が続く。ようやく本格的に練習ができるようになったのは、中体連の大会が終了した7月からであった。しかし、私たちの予想以上に生徒たちは意欲的に練習をする。生徒たちも男声合唱に魅力を感じ始めたようだ。変声期を終えた子が多い中3。“エンヤトット エンヤトット”の低い声は迫力があり、腹に心地よく響く。

私たちには、ひそかな目標があった。それは合唱コンクールに参加し、予選を勝ち抜き、全国大会に進出すること。この目標は、最初は夢でしかなく、誰も言葉として言う者がなかったが、生徒の間に次第に言葉となっていった。

さて、問題は女子生徒たち。

「先生たちは、男子の合唱練習にかかりきりで私たちの面倒を見てくれない」

と、何人かの女子生徒が抗議に来ることも度々あった。

いよいよ、合唱コンクールの予選が迫ったある日の午後学活時。女子生徒たちが体育館に来いと言う。そこで行われたのは、女子全員による男声合唱団への壮行会。しかも、知らない間に女子のみで練習した歌を贈ってくれた。副担任の先生や音楽科の先生たちが指導してくれたものであることを後で知った。人は支えられ、生かされている。ありがたいことである。

合唱コンクールでは好成績を残したが、全国大会への出場は叶わなかった。こうして、私の壮大なわがままは終わったのである。しかし、私には忘れられない一つのエピソードがある。それは、サッカーの試合での出来事である。当時、中体連大会後の3年生でも参加できるサッカーの大会があった。その大会に私は応援に行った。対戦した相手チームの服装や試合態度に不満をもったある生徒が、ハーフタイムに私にこう言った。

「先生、あいつらカッコよくない。あいつらの前で、俺たち斎太郎節を歌ってきましょうか」

「まあ、待て」

と私はやめさせたが、この子たちの中で合唱を通して追究してきたテーマ「本当のカッコよさ」に対する答えが見えてきているのだらうと思った。

あれから16年が経った。あの子たちも三十路を過ぎている。あの子たちをもう一度集めて斎太郎節を合唱したい。今度は女子も一緒に混声でやりたい。私の壮大なわがままPART2 が始まろうとしている。